校内別室指導支援員を活用した取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は周囲の環境に過敏であり、自分のペースで学習できない状況にストレスを抱えていた。教室で授業を受けようとするが、心理的負担が大きく難しい状況であった。また、起立性低血圧の診断を受けており、通常の登校時間に登校することが厳しく、欠席する日が続いた。

具体的な取組

○登校支援委員会の設置及び登校支援会議の実施

登校支援委員会（各学年の不登校担当・養護教諭・ＳＣ・ＳＳＷ・校内別室指導支援員）を毎週開き、当該生徒の情報を分析して、指導方針を決定している。また、会議録を校内の全教員が閲覧できるようにし、共通理解を図っている。

○ＩＣＴを活用した取組

タブレット端末を使用して、授業の配信を行い、別室や自宅で配信を見て学習できるようにしている。定期的にオンラインで面談を実施している生徒もいる。

○生徒の居場所づくり

教室に入ることに抵抗感がある生徒の学びを支援し、生活リズムを保つことができるように、自習できる別室を用意している。可動式のパーティションも用意して、必要に応じて使用できる。今年度は、コミュニケーション中心の別室も用意した。

２つの別室では校内別室指導支援員が生徒の様子を見守っている。

○ニーズに応じた部屋の準備

居場所用と自学自習用という２つの部屋を用意している。週５日午前９時から午後１時30分までの時間を２部制にし、対応する校内別室指導支援員を確保し対応に当たっている。

成果

当該生徒は、現在別室で主体的に目標を立て、自分の学校生活のリズムをつくって過ごしている。利用開始時よりも、明るく元気になり、利用時間を延長して給食を食べるようになった。休日に友人と遊ぶようにもなった。

課題

居場所づくりや学習支援のため、別室利用のルールを見直して、生徒にとって校内別室をより利用しやすくすることが課題である。

新たな居場所を作ることができた事例について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校１・２年生の時にほとんど登校できず、主に行事の際に登校するのみであった。３年生となり進路選択が控えていることもあり、登校回数は増えてきたが、授業には付いていけず、教室にいられないことが多かった。友人とも疎遠になり、精神的に不安定になった。

具体的な取組

○子供の居場所となる校内別室

登校してもすぐに帰ろうとしていたが、別室登校を始めたところ、様々な教員と交流できるようになり、学校で安心して過ごすことができるようになった。

○地域での居場所

卒業後を見据え、地域の行事に参加するように促した。地域の民生委員もしている校内別室指導支援員の働きかけで、地域の祭りの手伝いや、近隣児童館のイベントに参加して、社会とのつながりを増やすことに努めた。

○人間関係の構築

別室登校で校内別室指導支援員や登校生徒との関わりを促した。登校時に日々の生活の話をし、他の生徒と関わることも増えた。疎遠になっていた友人関係の再構築にも努めた。

○運動不足の解消

校内別室に登校した際に、バレーボールやバドミントンをすることを勧めた。初めはなかなか体を動かそうとしなかったが、少しずつ様々な活動を自分から行うようになった。

成果

毎日登校できるようになり、規則正しい生活や運動をすることで、生活のリズムが整い精神状態が安定してきた。学校関係者だけでなく、地域の様々な人と触れ合うことによって、前向きに自分の進路を考えられるようになった。

課題

校内別室が週２日のみの開室であり、それ以外は保健室が居場所になっていることから、校内体制の整備が必要である。

校内別室指導支援員と連携した校内支援体制の強化について

不登校児童の状況

対象児童は現在小学校２年生である。区内の別の小学校に入学したが不登校となり、１年生の途中から環境を変えるため転校してきた。教室に入ることができず、保護者の顔色をうかがい、登校を渋っている。主たる要因は、母子分離ができず集団生活への苦痛を感じていることである。

具体的な取組

○専門家や関係機関との連携

ＳＳＷや子ども家庭支援センターなどと連携し、家庭環境の改善を進める。また、母親と離れ、落ち着いて学習できるよう、管理職が中心となり、養護教諭・ＳＳＷ・校内別室指導支援員が連携して、別室が利用できることを保護者・当該児童へ伝え、登校を促した。

○安心できる環境づくり

校内別室指導支援員は、担任と連携した上で、会話やゲームをしながら学習への意欲付けを行った。また、プリントや漢字学習など工夫した個別指導で学習を促した。図工の作品づくりの指導を別室で行えるようにするなど環境を整えた。

○保護者との連携

担任と校内別室指導支援員が毎回の学習への取組、友達との関わりを価値付け、学習状況などを保護者に伝えるようにした。保護者も当該児童の状況を話すようになり、より効果的なアドバイスができるようになった。登校への安心感が高まっていった。

○学習に集中できる環境整備

一人一人の児童が、個々の特性や思いなどに応じて、集中して学習ができるように、パーティションや机の配置を変えられるように配慮した。

成果

６月頃からは校内別室指導員がいない日でも保健室登校ができるようになり、わずかに不登校の状況が改善している。２学期からは別室にて１日過ごせる日が増えた。不登校傾向や登校しぶりの不安が改善されてきた。

課題

学習に意識を向けられるようにし、教室での活動に参加できるように支援していく必要がある。

校内別室登校支援室の取組について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校５年生女子児童である。小学校３年生までは通常どおり登校していたが、小学校４年生の１月頃に同じクラスの友人からの暴言がきっかけで登校を渋るようになった。５年生になり、学級担任、SC、校内別室指導支援員の協力の下、少しずつ登校しぶりが少なくなっている。

具体的な取組

○安心できる居場所づくり

校内別室に衝立を置き、プライバシーに配慮している。また、ソファを置くなどし、当該児童にとって安心した空間になるようにしている。

○利用したくなる雰囲気づくり

校内別室指導支援員は、当該児童が興味をもっていることを話題にして、良好な関係を築くことができるようにしている。また、受容的な態度で接し、安心できるようにして、次も利用したくなる雰囲気をつくっている。

○関係職員の連携

校内別室で支援した内容は記録し、管理職、生活指導主任、特別支援コーディネーター、教育相談員、養護教諭、SC、SSW に回覧することで情報を共有し、対応に役立てている。

○学習支援

教室では学習への取組が難しい当該児童に、別室登校支援員が寄り添いながら、テストやドリル、読書など、状況に合わせた課題を進めるようにして、学習への意欲付けをしている。

成果

当該児童の遅刻日数は、４・５・６月で月平均 14 日間だったが、７・８・９月は月平均７日に減少した。また、昨年度はクラブなど異学年と交流する場は苦手で教室に入ることができなかったが、２学期になり異学年と笑顔で交流する様子が見られている。

課題

本校では週２日午前中に、校内別室指導支援員が出勤しているため、今後は、人員を確保し、毎日配置することができるようにすることが必要である。